慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「脱亜論」と中国分割論に関する一考察：福澤思想の現代的意義をもめぐって
Sub Title	
Author	今永, 清二(Imanaga, Seiji)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1985
Jtitle	近代日本研究 Vol.2, (1985.) ,p.261- 290
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤諭吉特集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19850000-0261

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「脱亜論」と中国分割論に関する一考察

——福澤思想の現代的意義をもめぐって——

今永清二

はじめに

一九八五年一月一〇日、この日は近代日本最大の啓蒙思想家福澤諭吉生誕一五〇年にあたる。折しも、一九八四年一一月一日に発行された新一万円札には、聖徳太子に代わって福澤の肖像が登場し、いわゆる福澤ブームが巻きおこっている。それは文化的レベルから商業ベースのものまで、広範多岐にわたっているが、福澤に対する関心を単なるブームに終らせてならないことは、言うまでもない事実である。特に、近代日本の方向を「脱亜」として決定づけた福澤思想を改めて考え直し、アジア、つまり福澤のいう「亜」とは一体何であったかを検討してみることは、国際化と情報化の進む現代社会における日本の役割を考えるとき、避けて通ることのできない問題である。

本稿では、最近、中国や東南アジア諸国において福澤の著作が翻訳・出版され、福澤思想が注目されていることにも触れながら、福澤が日本の近代化にいかに関わったかを、「脱亜論」及び中国分割論を中心に考察し、福

澤思想、なかんずくそのアジア観の現代的意義についても論じてみたい。

一　福澤思想と日本の近代化

福澤の理想は封建日本を近代民主社会、すなわち国民国家へと発展させることであった。[1] そして、そのために「独立自尊」の精神を説き、「一身独立して一国独立する」ことを国家及び国民に求めた。周知のごとく、近代民主社会、すなわち国民国家日本の創出を求める福澤の理想は、一世紀以上にわたってうけつがれ、現在にいたっている。福澤は幕末・明治期の社会状況と国際環境に対する深く鋭い認識をもち、「独立自尊」の精神にもとづいて日本の進むべき方向を説いたのであった。

福澤が生きた幕末・明治期の日本社会は、石川忠雄氏もいわれるごとく「歴史的断層」とでもいうべき社会状況のもとにおかれていた。[2] その社会状況の一面は日本社会を強く束縛していた封建的身分制であり、他の一面は日本社会が西洋列強による植民地化の危機にさらされていたということであった。アジア諸国もまた、同じような国際的危機に直面していた。封建的身分制と植民地化の危機が重層化した日本の社会状況に対して、啓蒙思想家福澤は社会変革のプログラムを提示し、近代的国民国家日本を実現しようとしたのである。

そして、福澤は「文明」、すなわち産業革命を経た西洋列強の価値体系・技術体系に普遍性を認めて、それを摂取し、また、文明を生み出した西洋の社会制度やイデオロギーをも導入しようとした。ここに、西洋事情の紹介、慶應義塾による教育、時事新報の刊行など、さまざまな分野における彼の多彩な活動が展開される。

福澤がこのような社会変革の具体的プログラムを提示・実践して実現しようとしたものは、日本を近代的国民

国家へと発展させることであった。また、そこに創出される社会は、道義と公正を重んじるものであり、権力や身分によって制約されない新しい社会でなければならなかった。

福澤は、このような近代的国民国家形成のために社会変革のプログラムを示し、一方、言論と教育の自由を実現することに努め、日本を真の独立国家へと発展させようとした。また、鎖国政策によって門をとざしてきた世界に対して日本を開放し、日本及び日本人が西洋文明を導入・摂取することによって、文明発展のために貢献しなければならないと考えた。そして、福澤はそのためには日本社会の根本的改革、いわゆる「近代化」が不可欠であることを説いたのである。

福澤がこの日本近代化の方向ないし方法をきわめて簡潔に論評したものが、明治一八（一八八五）年三月一六日、『時事新報』に掲載した「脱亜論」であるといわれる。(3)

福澤は、当時の日本人が外国から隔てられていたのに対して、三度にわたる洋行により、西洋事情に精通していた。しかも、彼は単なる博識の域をこえて、西洋近代社会の本質やその歴史的背景について、稀にみる深い理解と鋭い洞察をもっていた。そして、この理解と洞察をもとにして、「脱亜論」を執筆したのである。

(1) 飯田鼎氏は、福澤が国民国家論を唱えたとし、それを「一九世紀末のヨーロッパにあらわれた国民国家論――あえて誤解をおそれずにいえばマックス・ウェーバーのそれ――とその類型を等しくするものをみるのである」としている。飯田鼎『福沢諭吉』（昭和五十九年、中公新書）、一八七ページ。

(2) 石川忠雄「アジアと日本〈国際シンポジウム基調報告〉」『三田評論』第八四五号、八ページ。

(3) 「脱亜論」など福澤の対外論については、『福澤諭吉選集』第七巻（一九八一年、岩波書店）の坂野潤治氏の解説を参照されたい。また、初瀬龍平「〈脱亜論〉再考」『近代日本とアジア…文化の交流と摩擦』（国際関係論のフロンティア2）（一九八四年、東京大学出版会）二四―五ページは、福澤の国際政治論の学説の整理を行っている。

二　中国分割論の展開

福澤はその歴史認識において、文明の発展段階を設定した。それは、一九世紀中期、アメリカやイギリスに一般化していた「歴史の発展段階説」にもとづくものであり、[1] 福澤は人類史が野蛮→半開→文明へと発展するものと考えた。そして、維新期の福澤の文明論によれば、日本は半開の段階にあり、その到達すべき段階は文明、すなわち西洋文明とされた。また、西洋文明の段階に到達することは、福澤にあっては封建的身分制社会を打破することであり、西洋列強による植民地化の危機を克服する唯一の方法とも考えられた。

このような文明の発展段階を展開した『文明論之概略』執筆当時（一八七五）、福澤はアジア、なかんずく隣国中国は日本と同じ半開の状態にあると認識していた。福澤が本書において日中文明比較論を展開し、構造的中国認識をもっていたことは事実であるが、彼はたえず状況の変化にも注目して、中国やアジアを理解しようとし、国際関係に対する理解も構造的認識と情況的認識にもとづいて行われた。そして、彼の中国観、ひいてはアジア観は、東アジア植民地化の危機によってほぼ明治一四年（一八八一）前後から変化し、その国際関係理解も深刻となった。

特に、福澤は現実に展開する国際関係を「禽獣相接して、相食むもの」としてとらえ、[2] 食うものは文明国、食われるものは半開・野蛮の国と規定した。そして、文明開化した日本は、西洋の文明諸国と進退を共にし、食う側にまわることを提唱するにいたる。このような考え方を具体的に論じたのが、明治一七年（一八八四）一〇月一五日・一六日の、『時事新報』に掲載された論説「東洋の波蘭」である。[3]

福澤は、この論説において、「洪大なる東洋の老大国」中国を、しばしば分割の悲運に見舞われたポーランドにみたてて、アジアのポーランドと規定する。そして、一五年後の明治三二年（一八九九）には、中国は西洋列強および日本によって分割支配されるのであろうという予測を行い、フランスの宰相兼外務大臣の書簡と「支那帝国分割図」（以下、中国分割図と記す）という形でそれを示した。

この中国分割図は、フランスがイギリス・ロシア・ドイツと協議して作成した案とされ、イギリスは江蘇・浙江・安徽・湖北、ロシアは山西・陝西、フランスは広東・湖南・広西・雲南・福建南部、ドイツは山東・河南、日本は福建北部と台湾を領有すると予測し、直隷は各国連合領、甘粛・四川・貴州は借主領、朝鮮はロシア領、現在の東北中国は満清の領有に帰すとしていた。なお、日本がこの分割に加わるについては、次のごとく記している。

日本は其地理支那に近くして、欧洲の諸強国が今日の幸運に達するに当り、十数年来共に方向を与にして大に力あるのみならず、常に東道の主人と為りて便利を致したること尠からざれば、今台湾の全島と福建省の一半を占領するは誠に当然の分とす。殊に福建浙江沿海の地は、支那の前代大明の末葉に当りて、一時日本兵の侵略する所と為りしこと、歴史にも明なる事実なれば、今回其旧識の地に日章旗を翻がへすは日本国人の満足する所ならん。（『全集』第一〇巻、七八ページ）

もちろん、福澤はこの中国分割図について、こうした予測を行うことはむつかしいが、現在のアジアの情況からみて、まったく荒唐無稽のものともいえないとし、「唯当局者たる支那の人と之に間接する日本人は、東洋未来の命運を想ふて予め其成跡を画き、時に及んで待つ所あるは大切なる事ならんのみ」と結んでいる。

一八四五年六月から翌年六月にかけて、清仏戦争が展開したが、「東洋の波蘭」はまさに、このような東アジアの危機的状況のなかで書かれたものであった。中国はフランスに敗れ、東アジアにおける植民地化の危機は深

刻化した。福澤は危機意識を高めるとともに、この戦争を中国とフランスの戦争ではなく、「欧亜交争」、すなわち西欧とアジアの戦争としてとらえ、「事の真相を洞考すれば気運の然らしむる所にて、欧州文明の各国が漸く亜細を侵さんとするの際、仏蘭西が偶々其漸侵の端を開きたることとなれば、其大勢の実は欧亜交争の入手なり」という。要するに、福澤は清仏戦争を文明（西欧）と野蛮（中国）という視点でとらえたのである。

このような国際関係に対する認識にもとづいて、日本は西洋の文明諸国と進退を共にし、将来、中国の分割支配に参加するにいたるであろうというのが、「東洋の波蘭」の主旨であった。

(1) アルバート・クレイグ「福沢諭吉の歴史意識と文明開化」『三田評論』第八五七号、三八ページ。

(2) 福澤はこのような国際関係論を「外交論」（『時事新報』明治一六年九月二九日～一〇月四日）において展開した。以下、福澤の『時事新報』掲載論評は『福澤諭吉全集』（昭和三三～三九年、岩波書店）〔以下『全集』と略記する〕によった。

(3) 「東洋の波蘭」については、拙稿『福沢諭吉の思想形成』（一九七九年、勁草書房）二四五―七ページ。

三　「脱亜論」

「東洋の波蘭」発表約五ヵ月後、福澤は「脱亜論」を公にした。周知のごとく、それは約二、〇〇〇字からなる論説であるが、福澤が近代日本の進むべき方向を明確に示したもので、彼のアジア観の完成形態ともいわれている。「脱亜論」が日本近代化論ないしアジア侵略論として有名になったのは、おそらく第二次世界大戦後のことであろう。すなわち、近代日本の朝鮮・中国・東南アジア支配に対する反省、また、昭和三〇年代からはじまった日本経済の高度成長及び経済進出に対する批判または内省として、問題にされるようになったようである。昭和二六年刊の岩波版『福澤諭吉選集』には、「脱亜論」は収録されていない。また、福澤が「脱亜」の語を用い

ているのはこの論説だけであり、「脱亜入欧」や「入欧」の語も使用していない。(1)

ともあれ、福澤は「脱亜論」において次のように述べる。

我日本の国土は亜細亜の東辺に在りと雖ども、其国民の精神は既に亜細亜の固陋を脱して西洋の文明に移りたり。然るに爰に不幸なるは近隣に国あり、一を支那と云ひ、一を朝鮮と云ふ。此二国の人民も、古来亜細亜流の政教風俗に養はるゝこと、我日本国民に異ならずと雖ども、其人種の由来を殊にするか、但しは同様の政教風俗中に居ながらも、遺伝教育の旨に同じからざる所のものある歟、日支韓三国相対し、支と韓と相似るの状は支韓の日に於けるよりも近くして、此二国の者共は一身に就き又一国に関して、改進の道を知らず、交通至便の世の中に、文明の事物を聞見せざるに非ざれども、耳目の聞見は以て心を動かすに足らずして、其古風旧慣に恋々するの情は百千年の古に異ならず、此文明日新の活劇場に教育の事を論ずれば儒教主義と云ひ、学校の教旨は仁義礼智と称し、一より十に至るまで外見の虚飾のみを事として、其実際に於ては真理原則の知見なきのみか、道徳さへ地を払ふて残刻不廉恥を極め、尚傲然として自省の念なき者の如し。

我輩を以て此二国を視れば、今の文明東漸の風潮に際し、迚も其独立を維持するの道ある可らず。幸にして其国中に志士の出現して、先づ国事開進の手始めとして、大に其政府を改革すること我維新の如き大挙を企て、先づ政治を改めて共に人心を一新するが如き活動あらば格別なれども、若しも然らざるに於ては、今より数年を出でずして亡国と為り、其国土は世界文明諸国の分割に帰す可きこと一点の疑あることなし。如何となれば麻疹に等しき文明開化の流行に遭ひながら、支韓両国は其伝染の天然に背き、無理に之を避けんとして室内に閉居し、空気の流通を絶て窒塞するものなればなり。

輔車唇歯とは、隣国相助くるの喩なれども、今の支那朝鮮は我日本国のために一毫の援助と為らざるのみならず、西洋文明人の眼を以てすれば、三国の地利相接するが為に、時に或は之を同一視し、支韓を評するの価を以て我日本に命ずるの意味なきに非ず。例へば、支那朝鮮の政府が古風の専制にして、法律の恃む可きものあらざれば、西洋の人は、日本も亦無法律の国かと疑ひ、支那朝鮮の士人が惑溺深くして科学の何ものたるを知らざれば、西洋の学者は、日本も亦陰陽五行の国かと思ひ、支那人が卑屈にして恥を知らざれば、日本人の義侠も之がために掩はれ、朝鮮国に人を刑するの惨酷なるあれば、日本人も亦共に無情なるかと推量せらるゝが如き、是等の事例を計れば枚挙に遑あらず。之を喩へば比隣軒を

並べたる一村一町の者共が、愚にして無法にして然かも残忍無情なるときは、稀に其町村内の一家人が正当の人事に注意するも、他の醜に掩はれて堙没するものに異ならず。其影響の事実に現はれて、間接に我外交上の故障を成すことは実に少々ならず、我日本国の一大不幸と云ふ可し。左れば今日の謀を為すに、我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予ある可らず、寧ろ其伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も、隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に従て処分する可きのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かる可らず。我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり。(『全集』第一〇巻、二三八―四〇ページ)

福澤は『文明論之概略』を刊行した明治八年(一八七五)、日本は半開の段階にあるとしていたが、「東洋の波蘭」「脱亜論」を発表した明治一七、八年段階には、日本は西洋文明を摂取して、文明の段階に達したと考えた。一方、中国・朝鮮は文明化しようとしない、おくれた国、半開以下の野蛮国と認識した。そして、福澤は両国がまず政治改革を断行し、日本の明治維新に相当するような改革と人心の一新を行わないかぎり、数年以内に亡国の運命をたどり、その国土は文明諸国の分割に帰するであろうと予測する。「脱亜論」は、「東洋の波蘭」と同じ論旨であった。

ここには、中国・朝鮮に対する容赦ない批判が展開されており、福澤の中国・朝鮮観、ひいてはアジア観は、いわゆる停滞論的性格を帯びるにいたったといえる。このような福澤のアジア観がアジア蔑視の思想にもとづくものであり、それが否定さるべきであることは言うまでもない。

福澤は「脱亜論」において、アジアを中国・朝鮮に限定し、「脱亜」の問題を考察しているが、もちろん両国のみをアジアと認識していたわけではない。このことは、「其支那朝鮮に接するの法も、隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に従て処分す可きのみ」(傍点は筆者)という文章からも推定され、中国・朝鮮以外のアジア諸国に対しては、西洋列強と同じ態度で臨むことが、自明のこととして示唆されて

いた。[2] ともあれ、「脱亜論」は、「外交論」の「我日本国は其食む者の列に加はりて、文明国人と共に良餌を求めん」という論旨の論理的帰結でもあった。

「脱亜論」が発表された九年後、明治二七年（一八九四）七月、朝鮮問題を介して日清戦争がおこり、翌年、日本は戦争に勝利した。福澤は、「脱亜論」の現実的帰結を日清戦争の展開とその勝利として認識し、「戦争の事実は日清の間に開かれたれど、其根源を尋ぬれば文明開化の進歩を謀る者と其進歩を妨げんとする者との戦」と論じる。[3] すなわち、日清戦争は文明と野蛮の戦争と規定されたのであり、福澤が明言しているわけではないが、日清戦争は「脱亜論」の実現形態に他ならなかった。したがって、彼は日清戦争に絶大な讃辞をおくってやまなかったのである。[4]

（1）「脱亜入欧」という語がみられる最初の著作は、内山正如編『日本之輿論』（明治二〇年）というが、福澤はこの言を使用したことがなかった。

（2）拙稿「福沢諭吉の〈脱亜論〉――近代日本における「脱亜」の形成についての試論――」『アジア経済』第一六巻第八号、一七ページ。福澤のこの文章には、アジアの遠国に対しては全く会釈に及ばないという意味もふくまれているようで、「南進」の意図もあったことが予測される。

（3）「日清の戦争は文野の戦争なり」（『時事新報』明治二七年七月二九日）（『全集』第一四巻）。

（4）福澤は「京城駐在の日本兵は恰も文明開化の番兵」と称讃し、『時事新報』に連日社説を書き、三井八郎右衛門・渋沢栄一・岩崎久弥らと企って報国会を結成した。また、時事新報社は義金募集を行い、福澤も一万円の「表誠義金」を義損した。

四　「脱亜論」と開化論

「脱亜論」は、日本近代化の方向を提示したものであり、明治政府が実施した近代化政策の思想的伏線でもあった。

さて、福澤は初期の啓蒙主義的活動から、やがて「尚商立国」、さらには「尚工立国」を唱え、日本の資本主義化を主張した。[1] そして、近代日本は彼の唱導した基本線にしたがって資本主義化し、さらには資本主義から帝国主義段階へと発展して、朝鮮を植民地化した後に中国支配に向かい、ついで東南アジア進出にも乗り出していった。このような近代日本とアジアとの関わりをみるとき、「脱亜論」、及びその方向で進められた日本の近代化に対しては深い反省を加え、厳しくこれを批判しなければならないことは当然といえよう。

しかし、「脱亜論」が侵略論だけに終始するものであると、簡単には断定しえない側面があることも事実である。[2]

当時の日本をとりまく国際環境はきわめて厳しく、拱手傍観すれば、日本は西洋列強の植民地に転落するという危機に直面していた。「脱亜論」発表当時、福澤にあっては日本は近代化した文明国家に成長したとされたが、西洋列強との間に安政の仮条約以来の不平等条約を締結したままの国家であり、文明開化は進んではいるけれども、完全な独立国とはいえない状態にあった。

周知のごとく、福澤思想の根本は「独立自尊」の四字に要約されるが、『学問ノススメ』（一八七二～七六）において強調したように、福澤にとって文明とは西洋文明であり、同時に、文明は「一国の独立」でもあった。国際

的危機を克服して、国家の独立と日本民族の尊厳を保持するためには、先進国である西洋諸国から文明を導入することはもとより、諸制度の近代化や経済の資本主義化を進める以外には道はなかった。すなわち、文明開化、換言すれば開化論ないし発展論の段階は避けられなかったのである。

また、近代的国民国家形成のためには、封建的身分制社会からも脱出しなければならなかった。福澤が儒教主義を一貫して否定しつづけ、独立自尊の主張を行ったのは、まさにこのためであった。

福澤にとってアジアとは、地理的概念としてのアジアというよりは、封建的身分制社会、また、その社会を支える儒教及び儒教主義、すなわち封建主義に他ならなかった。(3) 進歩し文明化しようとしない社会の原理と精神が、「脱亜」の「亜」であった。

このような「亜」の克服なしには、文明の段階に到達することはできず、この意味からも、「脱亜論」は福澤のアジア観に根ざしたものであった。比喩的にいえば、福澤は日本の文明開化、すなわち開化論の一環として「脱亜論」を唱えたともいえる。文明開化という明治の大きな社会変革から切り離して、「脱亜論」を論じることはできないわけである。

加えて、福澤は、アジアがアジアであるが故にもっていた精神的風土から、思考操作によって日本を切り離すことも意図して、「脱亜論」を書いたのではないか、という指摘もある。論理の上から「脱亜」といえば。西洋人によって「停滞的社会」と規定される社会状態から脱出することであり、儒教及び儒教主義に起因する封建的身分制社会、すなわち封建主義を否定することでもあった。

したがって、そこには、アジアを棄てて西洋につくという単純な論理や発想だけが述べられているとも考えられない。

福澤は、人間社会の発展を野蛮→半開→文明という発展段階を設定して考察し、文明の段階に到達することを日本の目標とした。もちろん、文明とは西洋文明のことであった。しかし、福澤は、「複沢」というニックネームもあったごとく、複眼的な視角をもち、相対的思考を行う人物であったから、[4] 当面、目標とする文明は西洋文明であると考えたが、その西洋文明もいずれは克服されねばならないと主張していた。要するに、福澤は単なる欧化主義者ではなかったのである。

「脱亜論」発表前後、福澤は日本の対外政策を積極的に論評し、国権の発展を主張したが、一方では、明治政府の反動的な復古的傾向に対して、執拗といってもよいほどの反対の論陣を張っている。教科書の国定化、儒教主義復活の諸政策に対しては、徹底的に批判を加えた。[5]「文部卿は三田にあり」といわれたこともあるが、福澤は官途にはつかなかった。このような福澤の政治姿勢、そして、福澤が生涯を通して儒教批判を行って封建主義を否定し、文明開化を唱導したことと、彼のアジア観や国際観は、単純かつ短絡的に関連づけてとらえることのできない問題である。

また、福澤は、日本が西洋文明の方向を選択した以上、断固としてその道を守れとも強調していた。この意味からいえば、「脱亜論」には、中国・朝鮮との伝統的な国際関係を清算せよという主張もふくまれていたと考えられる。門弟井上角五郎らに対韓文化工作を実施させたり、朝鮮の開化派金玉均を援助したことなどは、このような発想から生まれたものと推定される。[6]

伝統的な国際関係に束縛されるならば、日本の新しい発展はありえず、日本も西洋列強による植民地を免れがたいと考えたわけである。

封建主義批判＝文明開化の主張という歴史的脈絡のなかで、福澤は「脱亜論」を書いたのであるから、彼は日

本の文明開化にとって不可欠な時間的拡がりを、「脱亜」という空間的拡がりに対置し、このような思考操作によって、日本の近代化に現実性と具体性をもたせようとしたともいえる。同時に、福澤は、「脱亜」の論理と社会変革のプログラムを提示することによって、当時の日本及び日本人に求められていた政治的課題である国民国家の形成、また、日本をめぐる国際的危機がきわめて深刻な問題であることを、国民に訴えようとしたわけでもある。

福澤は、西洋文明、すなわち産業革命後の先進技術など西洋的価値体系・技術体系に普遍性を認め、それを日本に導入することに努めた。もちろん、彼は西洋化することによって、日本近代化の最終目標が達成されるとは決して考えていなかった。しかし、当面、西洋文明を目標に近代化しなければ、「禽獣相食む」(『時事小言』)「数狼相群して呑噬を逞うせんとす」(「東洋の波蘭」)る厳しい国際環境のなかで、日本が国家的独立を保持することはきわめて困難であると考えた。

ここにおいて、福澤は、「脱亜」という形で日本社会変革の論理を表現せざるをえなかったのではなかろうか。「脱亜」の論理で近代日本の方向を予言したことが、シンボリックであるとさえいわれているのは、このような理由によると考えられる。

要するに、「脱亜論」は、近代的国民国家形成を目標にした明治日本の政治的文化的条件のもとにおいて、論理として具体的な形をあたえられた開化論ないし発展論の一形態であったといえる。(7)

福澤は、『文明論之概略』のなかで、日本が文明化したときは、西洋諸国にも一線を画して、日本国家の真の独立を達成し、かつ、民族の尊厳を保持していかなければならないと力説したが、この主張は生涯を通して変ることがなかった。この点について、福澤は『学問ノススメ』でも、次のように論じている。

東西の人民、風俗を別にし情意を殊にし、数千百年の久しき、各其国土に行はれたる習慣は、たとい利害の明なるものと雖ども、頓に之を彼に取て是に移す可らず、況や其利害の未だ詳ならざるものに於てをや。之を採用せんとするには千思万慮歳月を積み、漸く其性質を明にして取捨を判断せざる可らず。

然るに近日世上の有様を見るに、苟も中人以上の改革者流、（略）一人これを唱れば万人これに和し、凡そ智識道徳の数えより治国、経済、衣食住の細事に至るまでも、悉皆西洋の風を慕ふてこれに倣はんとせざるものなし。或は未だ西洋の事情に就き其一班をも知らざる者にても、只管旧物を廃棄して唯新を是れ求むるものゝ如し。何ぞ夫れ事物を信ずるの軽々にして、又これを疑うの疏忽なるや。西洋の文明は我国の右に出ること数等ならんと雖ども、決して文明の十全なるものに非ず。其欠点を計れば枚挙に遑あらず。彼の風俗悉く美にして信ず可きに非ず、我の習慣悉く醜にして疑ふ可きに非ず。（『全集』第三巻、一二五―六ページ）

「脱亜論」がこのような思想を前提にして展開されていたことを、忘れてはならないであろう。

ともあれ、福澤の唱えた「脱亜」の方向で日本は近代的国民国家へと発展し、近代国家の立場からアジア諸国と関わってきた。そして、日本は軍事・外交・経済・文化などさまざまの分野でアジア諸国と関係をもった。また、歴史が証明しているごとく、その多くは日本の押しつけに終始し、全体的には不幸な関係が展開した。

福澤の唱えた開化論と「脱亜論」、また、その方向で進められた日本の近代化は、日本とアジア諸国との関係に大きな影をおとしているので、今後、アジアの一国として日本がアジア諸国と実り豊かな国際関係を築いていくためにも、その開化論と「脱亜論」を再検討することが必要であろう。

（1）「商工立国の外に道なし」（『時事新報』明治三一年一月二五日）（『全集』第一六巻）。福澤は「商工立国とは内に物を製し外に之を売ること」と規定し、「今後局面の成行は断言するに容易ならず、いよいよ諸強国間に四百全州の分割を見るか、又は支那の版図の形は今の儘にしながら、鉱山採掘、鉄道敷設等を名とし、銘々に必要の土地を占領して自から支配の実を収むるか、孰れの手段に出づるや知らず可らずと雖も、兎に角外国人が内地を占領して其開拓に力を用ふるの成行は疑ふ可らず。……本来吾々の目的は支那の土地に非ず、其の土地

は何人の手に帰するも、商売の自由に差支なからんには毫も頓着せず、望む所は只商売の一事のみ。相手は四百余州幾億の人民にして、一たび国を開くときは満世界の品物を引受けて多々ますます弁ず可し。単に支那の一面に於てするも日本商売の前途亦多望なりと云ふ可きなり」といっている。

(2) 富田正文「〈脱亜論〉前後（下）—考証・福沢諭吉（六二）—」『三田評論』第八六一号、四九—五〇ページ参照。
(3) 拙稿、前掲書、一九三—七ページ。
(4) 丸山真男「福沢諭吉の考え方」『河出人物読本　福沢諭吉』（昭和五九年、河出書房新社）一七—二二ページ。
(5) 富田正文、前掲論文、前掲書第八六一号、五〇ページ。
(6) 富田正文「〈脱亜論〉前後（中）—考証・福沢諭吉（六一）」『三田評論』第八六〇号、五一—三ページ参照。
(7) 石川忠雄、前掲論文、前掲書第八四五号、九ページ。

五　中国分割論再論

さて、明治三一年（一八九八）一月一二日、福澤は「十四年前の支那分割論」を『時事新報』に執筆し、「東洋の波蘭」において、一五年後の明治三二年（一八九九）中国は西洋列強及び日本によって分割支配されるであろう、と予測した中国分割図を再録し、次のように述べる。

右（中国分割図）は我輩兼ての所見を仮りに在外友人の説として之を発したるものにして、其仏国を首動者として重きを帰したるは、当時仏清の戦争中なりしを以て時勢に適切ならしめんが為めのみ。又その所説の如きも時の外交上の事情よりして、時に辞を婉曲にして遠慮したる所も少なからずと知る可し。当時に於ては世間の人々も単に一場の茶話として軽々に看過し、深く意に留めざりしことならんなれども、何ぞ図らん、十数前の想像論、今は着々と事実に證せられて、分割の区域の如き、大凡そ間違いなきのみか、漫に千八百九十九年と仮定したる其期限さへも殆ど符合して、昨今既に分割の端を開くに至りしとは、大勢進歩の速なる、只驚く可きのみ。（『全集』第一六巻、二〇七ページ）

そして、日本が中国分割支配の一翼を担うことについては、同年四月三〇日の『時事新報』に掲載した「対清要求の理由」において、福澤は、日清戦争の結果獲得した台湾の治安維持という観点に立って清朝が福建省を他国に割譲しないと公表したことを評価した。

しかし、福澤の中国分割論再論は、西洋列強とともに日本が中国分割に加わるとはしながらも、永久にこれを支配するとか、土地・人民を支配するという単純なものでもなかった。同年三月二二日の『時事新報』の「支那人親しむ可し」には、日清戦争の戦後処理において、日本が遼東半島の割譲を断念したことの中国にとっての利害得失にも言及しながら、自ら中国分割論の意図について、次のごとく述べている。

近来支那人が外国人のいよ〳〵恐る可きを感じ、日本に親しむの心を生じたるは実際の事実にして、北京電報に支那の君臣は一般に日本に依頼するの念を懐くに至りしと云ふが如き、此辺の情況を報じたるものに外ならず。又我輩の別に接手したる報道に拠るも、彼の張之洞の如き、近来大に悟る所あり。此程の便船にて部下の一人を日本に渡航せしめ、其報告に由り凡そ百五十名の留学生を我国に送り各種の事物を学習せしむる筈なりと云へり。是種の所報に徴するも、以てます〳〵支那人近来の傾向を見るに足る可し。抑も日本人、決して無慾ならず。支那に対して大に求むる所なきに非ざれども、其求むる所は土地に非ず、人民に非ず、只商売貿易の一事にして、其目的は自ら利し兼て他を利せんとするに外ならず。而して此目的を達するには成る可く彼の国人に近づき、相方の情意を通じて互に相親しむに在るのみ。蓋し支那人も漸く日本人の心事を解し、漸く年来の猜忌心を去りたる者にして、彼より進んで親しまんとするこそ好機会なれば、充分に好意を以て彼に接し、以て其目的を達す可きのみ。日清戦争の事は今更ら云ふ可きに非ざれども、古来武士の言にも勝負は時の運に由ると云ひ、勝たりとて誇るべきに非ず、負けたりとて軽蔑す可らず。況して今日に述ては純然たる和親国にして、一毫の介意もある可らざるのみか、殊に最近の比隣国、平常の交際頻繁なる其上に、自ら利害の関係も密接なることなれば、ます〳〵相近づき相親しむ可きのみ。或は彼の国人の平生を見れば、運動遅緩にして活発の気風を欠くに似たれども、是れは其国の大にして自ら動くに便ならざるが為に外ならず。一たび動くときは案外に驚く可きものあらんなれば、決し

て因循姑息して以て目す可らず。況んやチャン〳〵、豚尾漢など他を罵詈するが如きに於てをや。仮令ひ下等社会の輩としても大に謹しまざる可らず。日本人たるものは官民上下に拘はらず、自ら支那人に親しむ利益を認め、真実その心掛を以て他に接すること肝要なりと知る可きものなり。（『全集』第一六巻、二八七ページ。傍点は筆者）

ここには、福澤が中国における洋務運動や変法派の改革を評価していたことも看取されるが、その中国分割論が「商工立国」という経済主義的観点にもとづいたことが認められる。

また、福澤は、同年四月一六日、『時事新報』に「支那人失望す可らず」を発表し、かつて日本も分割の危機に直面して対馬を一度はロシアに占領されたが、これを取りかえしたこと、中国分割支配が実際には列強の勢力均衡維持のための手段であるとも規定し、中国が失地回復を行うことに期待をこめて、次のようにも論じた。

本来外国人が競ふて支那の土地を要求したるは、畢竟列国間の均勢を保たんとするが為にして、全国を分割して之を支配せんとの野心あるに非ず。或は実際に斯る野心ありとするも、全国の分割は到底行ふ可らず。強ひて之を行ふときは其維持法に窮して結局自から苦しむの外なきのみ。故に支那人が目下の困難に懲り、自から奮発して其富源を開き、大に国力を養ふときは、版図の維持の如き、敢て難からざるのみか、或は既失の土地を回復して面目を全うするの望なきに非ず。要するに支那の実力に富めるは疑ふ可らざる所にして、朝鮮などの貧弱国と同日の談に非ず。今後の成行、決して失望す可きに非ざれば、今の困難の恰も経過の順序として自ら慰む可きのみ。或は支那人の身と為れば、日本の今日を見て大に羨むことならんなれども、日本は恰も支那の今日を経過して現在の地位に達したるものなり。支那人も早く目下の困難を経過して日本の今日に到らんことを期せざる可らず。（『全集』第一六巻、三〇五―六ページ。傍点は筆者）

なお、福澤は、日本の福建分割については、これを日本の台湾統治の手段であるとし、国際関係における勢力均衡の観点から、「一時借用」することを主張した。福建の借用は、福澤にあっては「自国自衛の為に外ならず。然かも決して占領などの意味に非ず、真実一時の借受にして、台湾の治安いよ〳〵鞏固の実を呈して実際他に妨

げらるゝの掛念なきに至れば、即刻還附に躊躇せず」とされたが、[1] 中国が西洋列強に対しては各地を割譲しながら、日本に対してこれを拒否する場合は、「威力を用ふべし」とも主張していた。

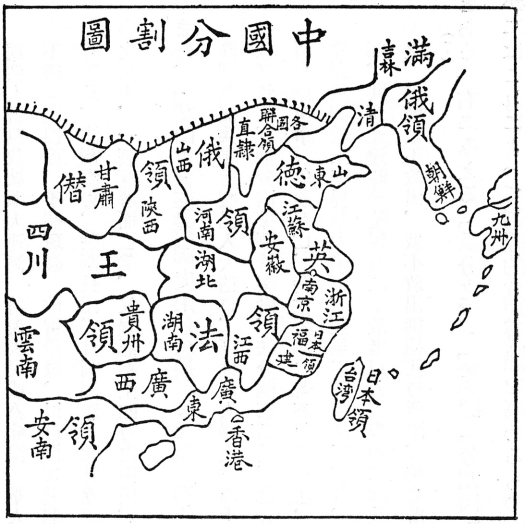
日清戦争が終り、下関条約が締結され、一八九七年、日中通商船行条約が結ばれた結果、康有為らが条約拒否を光緒帝に上書して、中国で国際的危機感が高まっていた当時、福澤は右に引いた論説をふくめて中国分割に関する論文を集中的に発表した。そして、一四年前に予想した中国分割図が実現していくことにふれながら、自らの中国分割案の意図するところを、以上のような形で展開し、中国の文明化に期待もした。福澤の中国分割論は、一般に考えられているほど単純なものではなかったのである。

一方、福澤の中国分割論は中国の知識人に大きな影響をあたえ、深刻な反省をよびおこした。同時に、日本に対する不信感も促進させた。

すなわち、福澤の「支那帝国分割之図」及びその分割案は中国語訳され、一八九八年三月三日（光緒二四年二月一一日）、『知新報』第四五に転載された。[2] それは、同年、つまり明治三一年一月一二日に発表された「十四年前の支那分割論」の翻訳であり、これが『時事新報』に掲載された直後に、中国に紹介されたことになる。[3] そして、これによって、中国が列強による分割の危機に直面している事実が、中国知識人の胸をうったのである。

『知新報』は、康広仁・阿廷光・徐勒らを中心に、華僑の支持によって、澳門で刊行された旬刊誌である。そして、本誌は「立憲君主」「西学新学」を提唱し、一八九七年二月二二日（光緒二三年一月二一日）、創刊された。同誌は『時務報』と主張を同じくしたが、[4] 福澤の中国分割論を転載し、変法を行わなければ、中国は列強によって分割され、清朝は滅亡するであろうと訴えたのである。

そして、このような危機を克服するため、一八九八年四月一七日（光緒二四年三月二七日）、「旅大租借協約」が



『知新報』第45所収

「東洋の波蘭」「十四年前の支那分割論」所収
(但し，後者は地図だけを収録している)

結ばれると、梁啓超、麥孟華らは「拒俄聯英急図変法」を上書した。(5)

麥孟華の「呈請代奏乞力拒俄請衆公保疏」（光緒二四年三月）には、中国分割図によって、国際的危機意識の高まったことが、次のように述べられている。(6)

竊俄人脅割我旅順大連湾、薄海人民咸為痛憤、挙人等来自田間、側聞朝議曲従其請、咸慮旅大既割、諸国接踵、立即危亡、不勝憂憤惶惶、不揣疏賤、敢冒斧鉞、以自貢其毳毳之愚。西人之覬我久矣、瓜分之図、騰布宇内、特今俄割旅大、英法必肯独讓、法割滇粤、英割長江、日割福建、耽耽逐逐、紛至畳来、二万里之幅員、一旦可以立尽、皇上豈忍以祖崇二百余年之天下、一朝瓦解而亡哉、又豈忍率土四万之臣民、一朝而尽為奴隷哉。

また、「掌山東道監察御史宋伯魯摺」（光緒二四年八月初六日）によれば、

昨聞英国兵艦七艘已入大沽口、声称俄人将大挙南下、特来保護中国。又聞俄君在其彼得羅堡、邀集徳法英各国、議分中国、絵図騰報、俄分満蒙燕晋秦隴、法分開広滇黔、徳分山東河南、英分呉越荆益。耽耽環視、旦夕宰割、是昔僅有其言者、今将見諸実事。危急存亡、変在頃刻。若不急籌善法、一旦分裂、悔将何及。

昨聞英国教士李提摩太来京、往見工部主事康有為、道其来意、並出示分割図。渠之来也、擬聯合中国日本美国及英国為合邦、共選通達時務曉暢各国掌故者百人、専理四国兵政税則及一切外交等事。別練兵若干営、以資禦侮。凡有外事、四国共之、則俄人不敢出、俄不敢出則徳法無所附、勢必解散。吾既合日、彼英与日素善、不患不就我範囲。

とある。(7) 右にみえる「瓜分之図」「絵図」「分割図」とは、福澤の中国分割図であり、清朝の知識人や政治家のなかにはこれによって国際的危機意識を高めるものがあらわれ、特に、洋務派・変法派、すなわち改革派の知識人は「拒俄聯英」論にもとづく外交政策の展開、清朝の政治改革の実現を期待するにいたったのである。また「聯英日」論も提唱された。

当時、改革派の知識人はロシアの遼東半島への進出、すなわち「旅大租借協約」の締結、また、ドイツの膠州

湾租借進出によって危機意識を高め、その国際的危機を回避するため、イギリスや日本との連合を説く「聯英日」論が展開していた。梁啓超・麦孟華の上書「拒俄聯英急図変法」も、こうした視点から提出されたものであり、翁同龢・張之洞らも「以夷制夷」という視点から「聯英日」論を唱え[8]、康有為も「聯英日」論を主張するにいたった[9]。

このような中国知識人の見解は、福澤の日清戦争後の国際観、なかんずく中国分割論とも微妙に関連するものであり、福澤は、明治三一年三月二二日、『時事新報』の「支那人親しむ可し」のなかで、日清戦争の講和において列強の干渉を招き、日本が遼東半島を還付したことに言及して、次のように述べる。

思うに支那人決して愚ならず、自から大体の利害を見るの明はありながら、当時の有様は危急存亡、後を顧みるに遑あらず、只眼前の急を免かるゝが為めに、外国の干渉を渡りに舟と認めて、取り敢へず其救助に依りたることならん。止むを得ざる次第なれども、時を経る僅に三、四年、昨今の成行は果して如何。当年の仏は忽ち閻魔に変じ、其要求甚だ大にして、今日まで譲りたる所を見るに、其大小、遼東半島と同日の談に非ず。其趣は恰も一万円の金を借用して返済に差支へ、他人に依頼して種々に談判の末、その周旋のお蔭にて漸く返金の急を免かれたれども、周旋人の為めに五万円の礼金を取られたるが如し。割に合はざる談にして、今日に至りては寧ろ遼島半島を日本に与へたるの得策たりしを認しことならん。

（『全集』第一六巻、二八五―六ページ）

福澤のこのような論理に対して、中国知識人がいかなる反応を示したかは、今後、具体的に検討する予定であるが、ともあれ、福澤が提示した中国分割図によって、中国知識人が国際的危機意識を高め、また、中国分割図が日本で公表されたことに危機感を深めたことは事実である。そして、彼らは清朝国家の改革を行うことによって、植民地化の危機を乗りこえねばならないと決意した。換言すれば、福澤の中国分割図は中国知識人を国際的危機意識に目覚めさせ、康有為の『日本明治変政考』にみられるように、「小国日本」の政治改革との対比にお

いて、中国もまた近代化、すなわち西洋文明の導入と政治改革が必要であると主張するにいたったのである。

失敗に終ったとはいえ、戊戌変法はそうした中国の近代化を求めた政治運動であり、福澤の中国分割図はその媒体の役割を果たしたのであった。

福澤の中国分割図がこのような形で、中国における植民地化の危機意識の拡大に一石を投じたことは、「脱亜論」に要約される福澤の近代化思想をさらに多面的に考察する必要を求めるものといえる。

(1) 「止むを得されは威力を用ふ可し」(『時事新報』明治三一年五月一日)〔『全集』第一六巻〕。

(2) 『知新報』第四五冊に翻訳掲載された「十四年前の支那分割論」は、次のごとくであり、日本人が中国を「支那」とよぶことを注記し、かつ、日本が中国分割図を公刊した点に注目している。

法國照會瓜分中國事 西正月十二號譯時事新報　原生學舍主人譯

瓜分支那國爲支那帝國之說有見識人數十年前經已臆及如我輩同志談及東洋形勢者常箸爲論說計此事亦無可疑前明治十七年十月間中國甲申法國福州之役本報經有東洋之波瀾一論已及瓜分支那之事在前十數年已有如此議論其中情節一毫不差地球大勢竟以我輩居然料及使我輩箸論殊有樂味試將如何瓜分支那帝國之說詳登報左俾閱者覽焉

日前有友由別處付來一書中有支那帝國未來記一篇觀其大意即以法共和國爲經略支那先鞭者其所欲得之地皆懸揣草定蓋其宰相某所區畫而歐洲諸强國及我日本均有回附茲將其照會案文列左

爲照會瓜分支那大帝國事照得我法國從事經略支那國事非一朝一夕前古之事可置

不問、一千八百八十三年、我兵在東京、曾與滿清政府齟齬、次年夏間議和、復因耶松事、因而中止、故我兵又礮擊雞籠福州、按據臺灣、其中支那與我國及歐洲諸强國所關係事端、極爲煩雜、今不復論、但使支那爲東方獨立帝國、實在不堪、即以直隷爲帝國之都、亦不能久、或使退至滿洲吉林等處內地方、則外治之地、鞭長莫及、將必荒廢不治、而又頑梗不逞之徒、乘時僭竊、割據四川貴州甘肅三省、餘盜匪所在擾亂、政綱紛然瓦解、滿清政府、惟縮頭束手、計無所出、踰長城內四百餘州、威令似足自由、實則無政治之一鄉已耳、唯近日歐洲諸强國、經將其沿海沿河口岸占領、其中不無略有塗炭、實則爲保護此中億萬生靈起見、其功德亦不可泯也、既能撫御此中之地、經理規畫、以迄于今、則曷不各瓜分其所有、釐訂彼疆此界、此事不可不亟圖之也、今試詳列各國瓜分界限域圖如左、右圖乃各國瓜分域限、爲我法國草定之私見、在歐洲諸强國

一、體經畧支那之地、惟我法國全力注于兩廣雲南湖南福建五省、英國勢力則在于兩江浙江安徽湖北五省、德國之勢力則在于山東河南兩省、俄之勢力主于朝鮮、餘力及于山西陝西、現雖未嘗公然分開域限、但各國經略之迹、已可概見、不可更有爭端也、又如四川貴州甘肅三省、前割據僭王之地、其三省風氣未開、且人未番息、物未豐饒、待其時候久之、亦自與各地不異、至北京滿清退歸長白山下、而直隷省爲首都、古帝國之地、則以爲各國公地、各國議定之後、公設一總督、任其施政、惟日本之地、逼邇支那、値今日歐洲諸强國、幸

運十數年來相助爲理功亦甚鉅應擬公舉日本爲東道主人今擬分與日本之方便利益當以臺灣全島及福建半省之地此誠當然之論也且支那當大明時福建浙江之沿海日本兵曾侵掠其地此事歷史亦見事實此次將其舊地再懸日章之旗日本君民當亦心滿意足矣

又澳門乃葡萄牙管轄多年之地今亦不復更改仍歸葡轄瓊州係屬廣東縣島仍歸法國我國係如此所見英俄法日本諸政府公認後將此照會大布於天下明年春季桃李花爛漫時爲期各國政府特命全權使節大臣合聚於揚子江會於南京評議決定本案爲此希望各國迅即照覆

一千八百九十七年十二月　法國宰相兼外務卿某照會

右列照會瓜分意旨本于公論爰發爲論說首創此意以肩重任者法國也憶從前法清爭戰時瓜分意旨早具於胸中惜外交各務未臻善美故婉曲容之未行遽發然此意思索已十餘年矣雖外間豪傑談世事者亦多及此但未經細繹人多以輕心忽之耳不料十餘年之空論今始得見實事撫今思昔若合符節焉瓜分區域此事當無舛錯也且瓜分事端茲已開列至于各國大勢其進步亦當倍速爰再記之以誌慨焉瓜分之說倡自德人已十餘年中國每一創敗輒復起語今禍機益迫勢將下手日本竟公然刊圖登報且聞其作討清國檄譯英俄德法文布告海內以圖我事成否未敢決然火及衽席主者猶顢頇未覺其謂之何爰亟譯刊報內以當當頭之棒凡我同類其能無恫與本館謹注

(3) 閔斗基『中国近代改革運動の研究』(一九八五年、一潮閣) 二二〇ページ。
(4) 方漢奇『中国近代報刊史』(一九八一年、山西人民出版社) 八七—八ページ。本書によれば、康有為の変法の奏摺などを『知新報』は掲載したとのことである。
(5) 『戊戌変法』II三三三ページ。
(6) 同右書II、三三三—四ページ。
(7) 『戊戌変法檔案史料』一七〇ページ。
(8) 沈鏡如「戊戌変法与日本」『歴史研究』一九五四年六号、一七—九ページ。本論文は、「瓜分」の危機によって、政治上の改良主義がおこったとしている。
(9) 閔斗基、前掲書、二二二ページ。

六 「脱亜論」の現代的意義

近代西洋からみれば、福澤が生きた時代のアジアは日本もふくめて、「文明におくれたアジア」であり、「停滞的社会」または「専制主義の風土化された地域」と認識された。このような西洋のアジア観は、福澤にも影響をおよぼし、その結果、彼は独自の文明論にもとづくアジア観をもつにいたった。そして、それは開化論を背景にした「脱亜論」に結実し、福澤は、西洋のアジア観をうけいれざるをえなかったという点において、アジアの国際的危機意識に目覚めた。同時に、危機意識に関わる複眼的な物の見方をもつようにもなり、近代化を進めるための具体的プランを策定し、その実現にも取組んだ。そのために、福澤自身も自己変革を遂げていった。

最近、このような改革者としての福澤が、アジア諸国で高く評価されるにいたっている。例えば、中国では「四つの現代化」を達成するために、一九世紀後半の清朝洋務派官僚や改良派知識人による近代化政策が再評価

され、また、「不徹底なブルジョア革命」と規定しつつも、日本で行われた明治維新に対する関心が高まるなかで、日本が封建社会から資本主義社会へと大きく転換した明治期に、西洋の近代思想の導入と啓蒙活動により、日本の近代化に貢献した福澤が、「傑出した啓蒙思想家」と評価され、その伝記『福翁自伝』（一八九九）が翻訳・出版された。

馬斌訳『福澤諭吉自伝』（一九八二・商務院書館）がそれであり、一九七八年版岩波文庫本（富田正文校訂・後記、小泉信三解題、年譜）を全訳し、これに『福澤諭吉全集』第一巻（一九五八・岩波書店）の緒言を抄訳して付記している。

もちろん、現代中国においては、すでに一九五八年、『学問ノススメ』一七編の全訳が群力訳『勧学篇』（商務印書館）として出版され、一九五九年には、『文明論之概略』も北京編訳社訳『文明論概略』（商務印書館）として刊行されており、両書は、初期日本資本主義発達史研究のために翻訳されたものである。

『福澤諭吉自伝』の出版もその一環として行われたものであり、中国の近代化を意識して出版された点で注目される。

本書の「出版解説」において、訳者は、福澤思想を前期（一八六二～六九）、中期（一八七〇―八一）、後期（一八八二～一九〇一）に分けて考察し、福澤が日本を西洋文明の段階に到達させたことを評価する。[1] 特に、福澤が日本の現実に立って「文明理論」を確立し、それにもとづいて日本と西洋を対比して、日本を後進国と規定したこと、また、西洋化の必要を説いたこと、さらに、一国の文明は人民の知識・道徳の高位によって規定されるもので、文明が進歩しつづけるものであることなどを考察した点に注目している。

中国における日本研究は、明治維新研究に重点がおかれており、明言は避けているものの、『福澤諭吉自伝』

の出版は、近代化を達成しようとする中国の指針として刊行されたものといえよう。

また、東南アジア諸国においても、福澤への関心が高まっている。例えば、タイでは、一九八二年、『学問ノススメ』が出版された。本書は、在日留学生八人により翻訳されたもので、タマサート大学日本研究センターの刊行である。本書出版の背景には、高級官僚・軍人の地位が極端に高く、一方、封建主義もなお根強く残っており、政治的近代化が妨げられているタイ社会において、人間の平等、自由・独立、独立自尊、学問の大切なことを説いた福澤の啓蒙思想が、積極的意味をもつという事情があるという。なお、インドネシアでも、民族大学日本研究センター長アリフィン＝ベイ博士が、『学問ノススメ』の翻訳を完成させ、一九八五年末、『封建主義から近代化へ』(DI ANTAPA FEODALISHE DAN MODERNISHE) という書名で出版された。

このような例にみられるごとく、中国・東南アジアで福澤が評価されているのは、各国が新たな近代に対する認識を創出しつつも、それぞれ近代化のための自己変革と現実的対応に迫まられ、福澤思想に指針を求めようとしているためであるといえる。

さて、「脱亜論」に帰結する福澤の日本近代化論、また、そのアジア観は、否定され克服されなければならない側面をもつ。福澤思想に、古い要素があることも事実である。にもかかわらず、最近の中国・東南アジアにおける福澤思想評価という広い視野に立ってみると、「脱亜論」は新しい課題と展望を現代日本に求める。

「脱亜論」は、単純にアジアを棄てて西洋一辺倒になるという発想から出たものではなかった。福澤が西洋文明を目標としながらも、いずれは西洋文明も乗りこえていかなければならないと明言したのは、このことをはっきり示している。おそらく、福澤は、アジアにも西洋にも共通しうる新しい展望を開こうと考えていたのであろう。それは、現在、世界が直面している問題、すなわち、先進国も発展途上国も、それぞれが国家の独立と尊厳

を保持した上で、国際理解と国際協力のもとに新しい世界文化を創造していくべきであるという問題にも関わるものであった。

世界文化の形成と発展に貢献していくためには、まず、各国の独立と民族の尊厳がなくてはならず、しかも、その前提として、「個人の独立」が不可欠である。福澤は「一身独立して、一国独立す」と力説したが、「一国独立す」とは文明化であり、文明化することによって、後進国日本は西洋諸国と対等に立ちむかうことができ、その上に新しい文化的地平を開拓すべきであると考えたわけである。

福澤の生きた一九世紀の日本は、西洋諸国からみれば、後進国にすぎなかった。ペリ来航が一八五三年、明治元年が一八六八年、大日本帝国憲法発布が一八八九年、国会開設が一八九〇年、条約改正が一八九九年、この時代は日本が近代的国民国家へと発展していった時期である。

福澤にとって、日本が西洋の先進資本主義国と同列に並びうるか、また、植民地化の危機に直面するアジアの一国として列強の外圧に服するか、世界史的にみた場合、後進国日本としては西洋文明を目標に資本主義化し、近代的国民国家を創出する以外に方法はなかった。そのためには、まず、「歴史的断層」の一つである徳川幕藩体制にもとづく封建的身分制社会を否定し、自由主義と民主主義を育成することが必要であった。一方、「歴史的断層」の他の一面である植民地化の危機に関しては、先進国である西洋諸国に対しては柔軟に対処し、これと比肩することが必要であった。啓蒙的指導者として日本の後進性を憂える福澤は、封建的迷蒙から脱去しえない国民を近代に目覚めさせ、日本人を新しい国民へと脱皮させるため、文明開化の旗を振りつづけた。そして、彼は開化論を背景に「脱亜論」を発表する。

また、「脱亜」の論理にもとづいて、以後、日本の近代化は達成されていった。

「脱亜論」が厳しく批判されなければならない内容のものであることはいうまでもないが、福澤がそれを発表し、中国分割図を公表した当時の日本及びアジアの国際環境は厳しく、かつ、政府の国内政治は儒教主義復活へと始動していた。福澤は内政・外交ともに厳しい状況を冷静にうけとめて、儒教批判を徹底して行い、また、「脱亜論」を発表したのである。

戊戌変法期の中国知識人が中国分割図によって国際的危機を深刻にうけとめたこと、[2] 最近、アジア諸国で福澤思想に一定の評価がなされているのは、このような福澤の現実重視の姿勢に根ざすものといえる。また、福澤が合理的で複眼的な思考を行ったこと、価値観が相対的なものであることを説いたことなども注目されている。福澤とて時代の制約を免かれることはできなかったが、彼の掲げた社会変革のプログラムは、現在もなお日本社会に生きつづけ、かつ、アジア諸国の一つの指針ともされている。福澤思想、なかんずく「脱亜論」が象徴的であるといわれるは、おそらくはこのような意味からでもあろう。

(1) 馬斌訳『福沢諭吉自伝』(出版説明) 二―三ページ。
(2) 拙稿「清末中国知識人の〈福沢観〉」小林文男編『近代中国における対日観の研究』(一九八四年、広島大学) 三一―八ページ。

おわりに

一九〇一年二月三日、福澤は六六年の多彩な生涯の幕を閉じた。彼の法名は「大観院独立自尊居士」、その生涯に応わしい戒名である。福澤思想の核は「独立自尊」、すなわち個人も国家も独立と尊厳を保つべきであるとし、それが彼の日本近代化論の骨子であった。そして、その前提に院号の「大観」、つまり事物を大局的に把握

するという思想があった。

日本とアジア、世界の現状をダイナミックにとらえ、その進むべき方向を見定めた上で、福澤は「独立自尊」を唱え、また、「脱亜論」を公にした。「脱亜論」を福澤思想のダイナミックな展開のなかに位置づけて、多面的に考察することが強く望まれるゆえんである。

ともあれ、世界の状況を「大観」し、各国が世界文化の形成にむかって「独立自尊」の道を歩むべきとする福澤の思想的営為は、現代にも十分通用する価値をもつといえよう。

附記

本稿は、中国分割論と中国知識人について本格的に論じる予定であったが、インドネシア出張（海外学術調査）のために一般論に終った。いずれ稿を改めて論じたい。なお、ジャカルタでは、一九八六年一月一五日、民族大学の新年特別講演会において、講演 FUKUZAWA YUKICHI: GURU PENCERAHAN ZAMAN MEIJI MODERN (Enlightening Teacher Fukuzawa Yukichi in Modern Japan) を行った。